

発表資料：2024年10月7日 ニュースリリース（教育）

## 帰国生、国際生のためのサポートブックを公開しました

啓明学園（東京都昭島市）親の会、グローバルネットの会は、「KEIMEI Real Voice ～帰国生、国際生のみなさまへ～」を作成しました。

啓明学園は、1940年、三井高維先生（三井総領家第十代当主三井高棟の3男）により、帰国子女を受け入れるために設立され、現在も3割以上の児童・生徒が帰国生、国際生です。

本サポートブックは、在校生の保護者およびこれから入学、編入学される国際生の皆様向けに、海外からの編入時の疑問や不安におこたえするために、グローバルネットの会\*が作成しました。保護者の目線でさまざまな疑問に答える内容となっており、啓明学園への進学をお考えの方のみならず、帰国生、国際生とご家族にも有益な内容となっています。

初版は2008年に刊行され、今回、16年ぶりに増訂版の発行となりました。



啓明学園ホームページで公開するとともに、ご希望の方にはブックレットを配布しております。

[20240914-66e4efd976396.pdf \(keimei.ac.jp\)](https://www.keimei.ac.jp/20240914-66e4efd976396.pdf)

\*グローバルネットの会：帰国生の保護者、国内インターナショナル生の保護者、外国籍生の保護者の情報交換や悩みを共有する場として立ち上げられた会。現在、卒業生の保護者や、国際社会や異文化交流などに興味をお持ちの国内生の保護者など、啓明学園の保護者の保護者ならどなたでも気軽に参加できる会に発展しました。月1回、学園内で活動中。

## ブックレットの一部ご紹介 (Q&A)

保護者のみなさまのさまざまなご質問に答える形式で、本サポートブックが構成されています。ぜひ、啓明学園ホームページにアクセスいただき、ご覧ください。

**Q.** 国際生の母語のサポートはどのようにされていますか？  
気をつけている点はありますか？

**A.1** 今まで持ってきた言語（母語）が弱くなってしまうと言葉の基盤が揺らいでしまいます。そうなると日本語習得にも影響が出てきます。また、言葉の基盤が揺らいでしまうと、その子どもの人格形成にも良い影響がないので、今持っている第一言語を大事にすることを心がけています。

**A.2** 母語の指導も発達段階によって異なります。4年生以上で帰国の場合、滞在国の言語が第一言語で定着している場合が多いです。しかし、低学年の場合は、日本語が学習の言語、家庭の言語は別という場合があります。例えば、中国の両親を持つ2年生の生徒達が国際教室で、週に一回、中国語の授業を受けているのですが、この時間は家庭（生活の言葉）の言語の勉強の時間、気持ちいい時間、アイデンティティーを育てるのにもいいかなと感じています。楽しそうに授業を受けていますよ。授業の内容は、1年生のうちは「話す聞く」を中心に、2年生のうちは「読む」ことを始めました。絵本を読んでいます。3年生のうちは、日本語を学習の言葉として学校で学んでいる中で、中国語の読み書き学習まで加えると混乱してしまうので、が定着するのを待っているところです。

**Q.** 帰国直後の数年間の学習は、言語が障害となって真の理解にはなっていない部分もある生徒もいると思いますが…

**A.** すべての教科を短い期間でキャッチアップすることは難しく、それなりの時間がかかると考えています。例えば、～工業地帯を知らなくても、他の生徒が知らないことを海外で学んできています。だからすべてがみんなと同じである必要はないと思います。教科用語は授業でなんとなくわかったら、その他の生活ですごく困ることはないので、すべてを記憶させておく必要はないと思います。大事なことは、思考するための言語がなくなったら困るということ。自分が伝えるべきことを伝えることができ、考えることができる言語を持っていたら、今は全部のことは無理だけど、長い間をかけてみると、本当に必要なことは最終的に自分で学ぶ力を身につけることがよいのかな、と捉えています。

**Q.** 複数言語、多文化に囲まれた生徒たちを指導されて何かお気づきになったことはありますか？

**A.** 私たち国際学級でのポリシーの一つに「言葉を支える」というのがあります。生徒たちの言葉全体を支える、日本語をとにかく勉強させるということではなく、例えば培ってきた言語に中国語・英語などがあるならば、それら全部を支えてあげる必要があると考えています。なぜなら、それは宝であり財産なので、生徒たちの強みになっていくと確信しているからです。そして、母国語と第二・第三言語はお互いに関係しているので、どれかの言語だけに集中したところでその言語が伸びるわけではありません。生徒たちの持っている言語全体を支え、思考力を向上させる事が言語の伸びにきます。日本語・国語の授業で生徒たちと接する時に、例だったらTOEFL ITP（学内で毎年11月に実施しています）などで成熟度を視野に入れて担当の先生とも確認を取りながら本語・国語の授業に生かせるよう工夫しています。それほっと伸びたときに、そのあと国語もぐっと伸びるというのに私たちが感じているからです。これは別の言語でも同じえます。

**Q.** 学年レベルに追いつくための家庭でのサポートはどうすれば良いでしょうか？

**A.** 日本では小学校低学年（1, 2年生）の子ども達への宿題のケアをお母さん方がすることが多いですが、特に海外から帰ってきたお子さん達は宿題の習慣がなかったり、日本語もどうしたらいいかわからないため、日本人のお母さん達は過去お過ごしになった日本の学校のイメージで、子どもの宿題を見ていただけるとありがたいなと思います。特に音読を聞いてあげることがとても大事だと思いますし、文字を書いたり、言葉の意味がわからなかったりする時に、つきっきりではなくても子どもに教えていただけるとありがたいです。（家事をしながらも）お母さんの方に、声をかけやすい、質問をしやすい雰囲気があるといいですね。また、（できれば毎日）読み聞かせをしていただくとお子さんの日本語の力が伸びます。毎日が難しくれば週末でもよいです。おうちの方の一番得意な言語で読んであげてください。

学校法人 啓明学園

理事長 夏坂真澄

〒196-0002

東京都昭島市拝島町 5 丁目 11 番 15 号

電話：042-541-1003

e-mail: [sawa-t@keimei-std.jp](mailto:sawa-t@keimei-std.jp)(担当：澤)